

プロジェクトで復興を支援する 再生のアカデミズム

【実践編】

第13回

プロジェクト名

大槌文化ハウス

東大と縁の深い大槌町に、この9月、図書室や展示室の機能を持つ小さな文化施設が誕生しました。町の文化を再生する拠点に、と設営したのは総合研究博物館。プロジェクト担当の松本文夫特任准教授にお話をうかがいました。

——「大槌文化ハウス」の概要と、オープンまでの経緯を教えてくださいませんか。

松本 博物館にできる復興支援は何かを考えて生まれた小さな文化施設です。博物館からの寄贈図書3,500冊と学術標本を配置した53㎡の部屋です。書棚、大テーブル、プロジェクタ、エアコンを配備し、読書・学習・集会の場所として利用できます。完成後の管理運営は大槌町が行い、博物館は文化支援の活動を通して今後の運営に協力していきます。

プロジェクトの発端は、震災後の4月に西野嘉章館長の発案で準備した「モバイルゲル」です。館収蔵のモンゴル遊牧民のテントを運んで人が集まる施設を作る案でしたが、場所が確保できず実施に至りませんでした。その後、仮設住宅地で中長期的に使用する戸建の「文化ハウス」を計画しましたが、資金調達の状況が変わって行き詰まりました。打開策を協議する中で、高台にある大槌町中央公民館の一室を使わせていただくことにな

りました。内装工事だけなら費用を大幅に減らせます。今年の春に実施案をつくり、夏に設営工事を済ませた次第です。

—— 複数の企業が支援してくれたそうですね。

松本 はい。渉外本部に紹介された世界的金融企業のパークレイズ・グループと、以前から博物館の「モバイルミュージアム」に支援をいただいている新日鉄興和不動産株式会社から、貴重なご寄附をいただきました。施設設営だけでなく、今後の運営にもご協賛をいただく予定です。さらに、地元の三浦設備株式会社にはエアコン設置のための電源引込工事でご協力をいただきました。感謝をこめて入口横のパネルに3社の名を刻みました。

—— 室内に目をやると、4点の展示物が博物館らしさを醸し出していますね。

松本 海のウミカラムツ、空のオオアカゲラ、陸のアンティロープ・マスク、そして人工物の数理模型です。最初からカテゴリを分けたわけではなく、博物館コレクションから候補を吟味した結果こうなりました。2006年から博物館で「モバイルミュージアム」という分散連携型の博物館プロジェクトを実施していますが、大槌文化ハウスもその一つとして位置づけています。図書はすべて博物館の教職員や家族友人からの寄贈品です。文学全集、事典、単行本、文庫本、絵本、マンガと何でもあります。

—— いろいろある方が日常的ですね。

松本 大槌文化ハウスの管理運営の中心

東日本大震災、それに伴う原発事故という未曾有の大災害の発生以降、東京大学では様々な形で復興支援を行っています。また、総長メッセージ「生きるともに」に表されているように、先の長い復興に向けて、東大は被災地に寄り添って活動を行っていく覚悟でいます。この連載では、救援・復興支援室に登録されているプロジェクトの中から、復興に向けて持続的・精力的に展開している活動の様子を順次紹介していきます。

となる大槌町生涯学習課の佐々木健課長は以下の言葉をよく引き合いに出されます。「文化とは人々の日常生活を集めたものである」。大槌とゆかりの深い作家・井上ひさしさんの言葉です。ハードの整備が先行するなかで、町の文化をいかに再生するか。それは人々の日常生活の再生に他ならないということです。

大槌文化ハウスの完成はプロジェクトの第一段階です。大槌町による運営を継続的に支援するのが今後の私たちの役割です。文化支援の一環として、東大の研究者によるレクチャやワークショップの開催を企画しています。研究者が専門分野を伝えるだけでなく、どこかで地域との関わりを意識し、そこから新しい研究課題が展開することもあると思います。

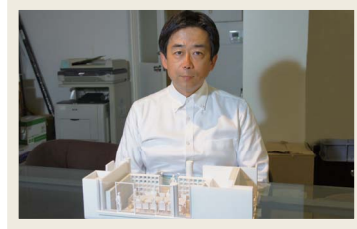
—— 外からの文化支援は他にあるのですか。

松本 学外の事例ですが、大槌町では防災行政無線で正午に「ひょっこりひょうたん島」のジャズ調のテーマが流れます。3.11の津波で音源が流失し、佐々木課長の仲介でピアニストの小曾根真さんが新しい音源を提供されました。外部の協力者が大槌の地域資源と出会い、新しい文化が生まれたわけです。

大学の研究教育の機会はキャンパスの内部に留まる必要はありません。「モバイルミュージアム」や「インターメディアテック」で博物館の活動は学外に飛び出しました。いまは大学が外に出ることができる時代です。大槌文化ハウスは小さな施設ですが、ここでの活動が大槌の文化再生の一助になればと思います。



高台にある中央公民館の一室を改装してつくられた「大槌文化ハウス」。窓からは大槌の市街地が見える。右上の写真は展示物の一つ、オオアカゲラ



「大槌文化ハウス」の建築模型と松本先生

プロジェクトに関する問い合わせ

総合研究博物館 特任准教授 松本文夫
matsumoto@um.u-tokyo.ac.jp

構成：本部広報課（内線：22031）